



第 1 章

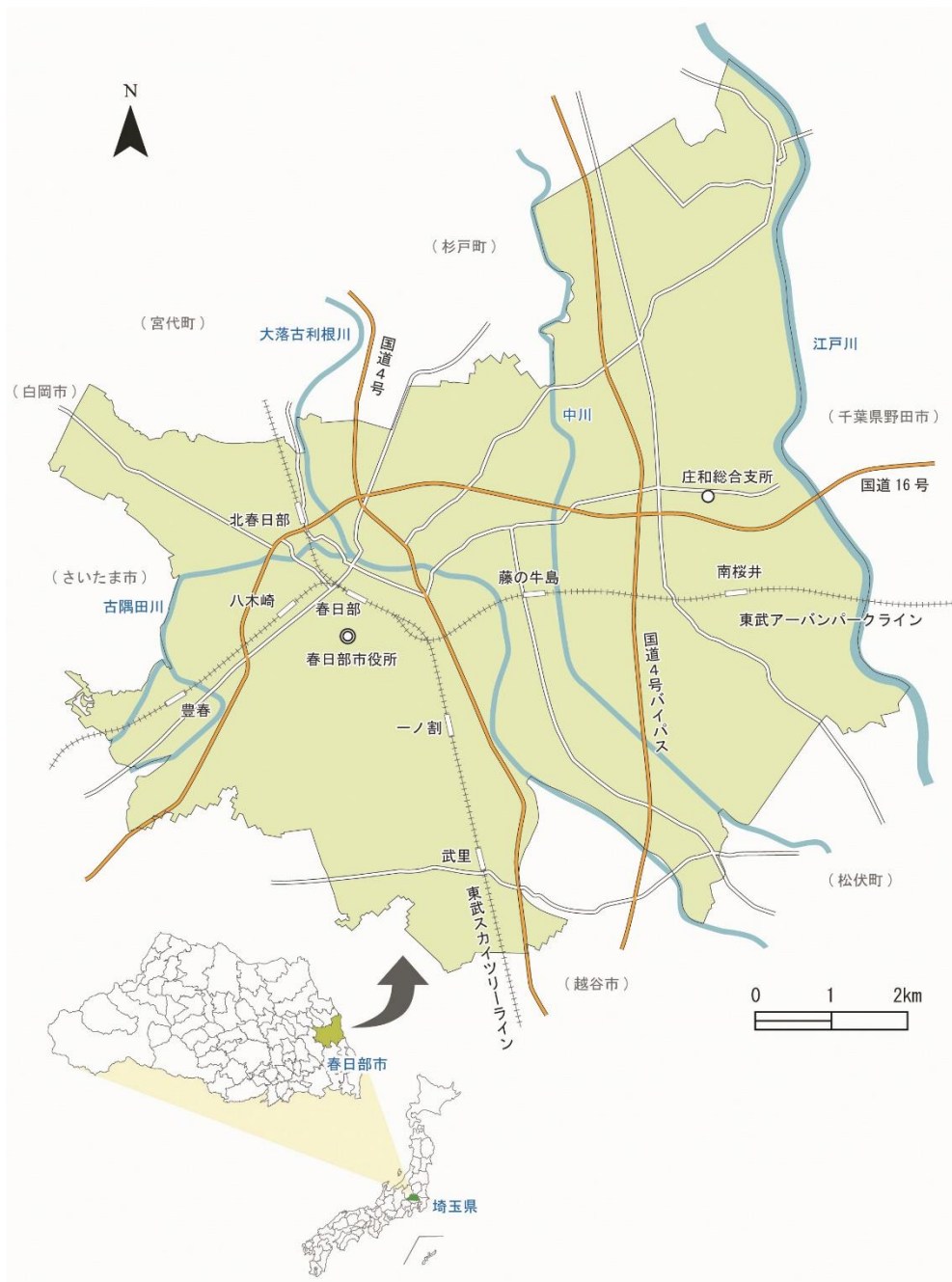
春日部市の概要

第1章 春日部市の概要

第1節 自然的・地理的環境

1 位置・面積

本市は、関東平野のほぼ中央、内陸県である埼玉県の東部に位置し、都心から35km圏にあります。広ぼうは東西11.7km、南北12.5km、面積は66.00km²で、市役所所在地の経緯度は、東経139度45分、北緯35度58分です。北は宮代町と杉戸町、南は越谷市と松伏町、西はさいたま市と白岡市、東は江戸川を挟んで千葉県野田市と接しています。

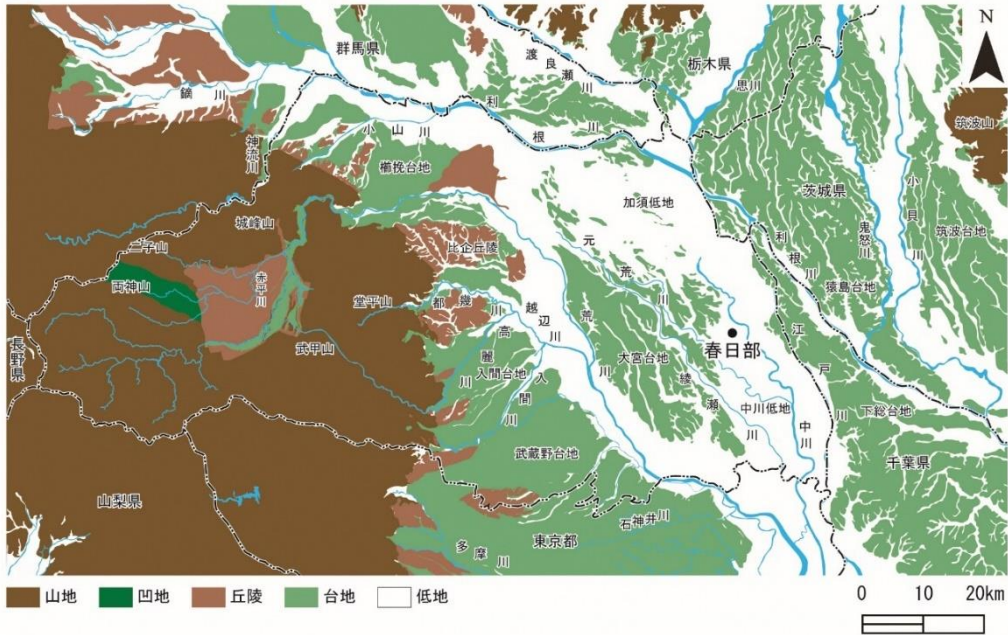


1-1 春日部市の位置

3 地形・地質

本市の地形条件は主として台地と低地に大別されますが、市域の約90%が中川低地に^{ながかわ}あたることから、標高の最高値は14.96m、最低値は3.94m、平均標高は約6.4mと低位であり、起伏が少なく平坦な地形が特徴となっています。

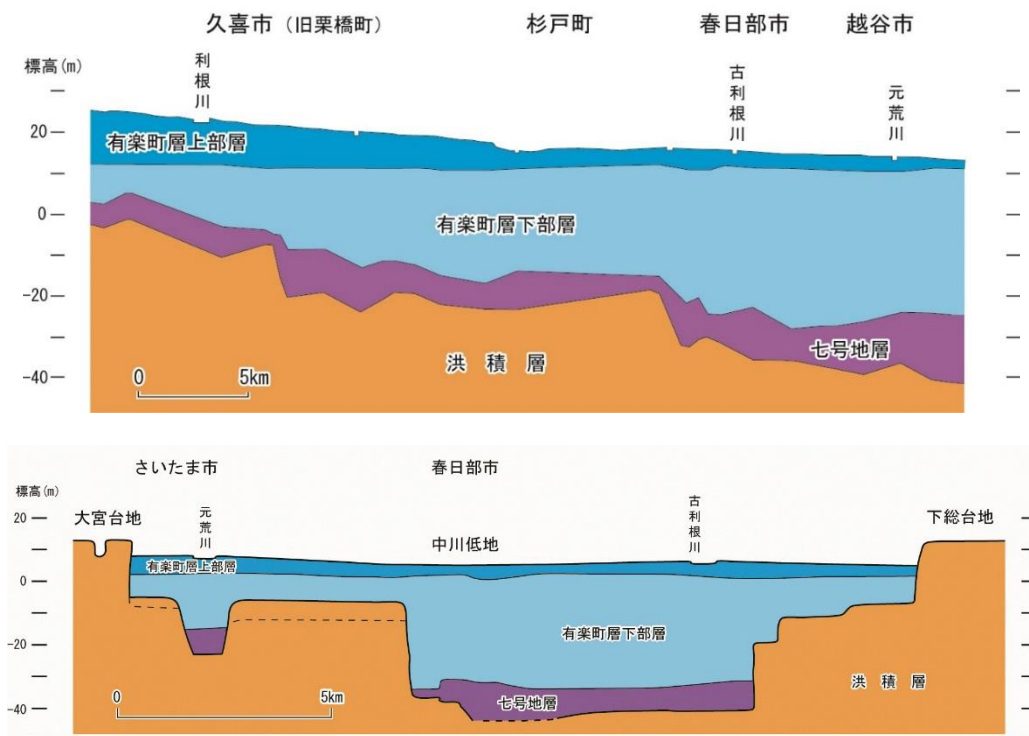
台地は、関東ローム層に覆われた平坦な頂面を残した地形で、市域には大宮台地と下総台地^{おおみや しもうさ}といった2つの台地面が分布しています。大宮台地は、平野内に孤立して低地に囲まれた島状の地形となっています。台地の南部は段丘崖を形成し低地との比高差が明瞭ですが、北部及



1-3 春日部市の地形

び北東部は台地面が徐々に低くなり、北方の加須低地の中に埋没していく状況にあります。この埋没台地については、約 2,250 万年前の新第三紀中新世の中頃から現在に至るまで続く関東造盆地運動と呼ばれる関東平野の沈降運動によって形成された特異的な地形として認識されており、埋没以前の大宮台地は群馬県側の邑楽台地と連なり赤城山麓から半島状に続く地形であったと推定されています。また、台地内を多くの河川が流下しているため、河川の開析により台地本体から分離した支台群が形成され、市域の北西部と西部には大宮台地東縁を構成する慈恩寺支台の南東端が伸びています。一方、下総台地は、千葉県の北部から中部に広がる広大な台地面をもち、台地縁辺に多数の開析谷が発達するため急崖な地形を呈し、台地頂部は平坦面が連続するなどがその特徴となっています。県域でみられる下総台地は、江戸時代初期の江戸川開削によって台地本体から切り離された部分で、市域の北東部に宝珠花支台の南端、南東部に金杉支台の北半が伸びています。

今から約 9,000 年前に、地球全体の温暖化に伴い海水面が上昇（海進）を始め、約 6,500 年前に上昇のピークを迎えました。ピーク時の海水面は現在よりも 2~3m 程度高く、関東地方では栃木県栃木市の南部まで海岸線が達していたと考えられており、中川低地周辺に形成された海は奥東京湾と呼ばれています。その後、海水面の低下（海退）が約 5,300 年前に始まり、停滞や変動を繰り返しながら、約 1,800 年前には現在の海岸線の位置になったと考えられています。中川低地は、このような海進期の海成層を主体に海退期の土砂の堆積によって形成された沖積地であり、低地上には河川の作用によって形成された自然堤防や河畔砂丘といった地形をみることができます。なお、利根川流域の河畔砂丘は、平安時代から室町時代にかけて、榛名山や浅間山の火山灰などに由来する大量の砂が、冬季の季節風により利根川の旧



1-4 春日部市付近の地質断面(上:北-南方向、下:西-東方向)

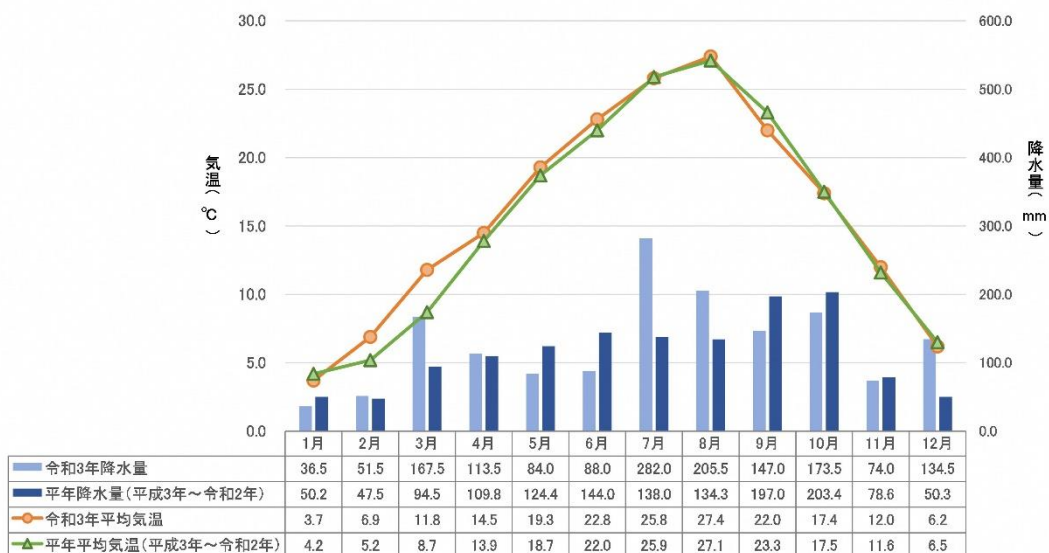
川は、市域部分については江戸時代初期の寛永年間（1624-43年）に人工的に開削された河川で、関東各地と江戸を舟運で結ぶ流通路として利用されていました。

5 気候

本市の平成3年（1991年）から令和2年（2020年）までの年平均気温は15.4℃と温暖ですが、夏は高温多湿な気候となっています。月平均の最高気温は8月の27.1℃、最低気温は1月の4.2℃となります。

また、年間降水量は1,366.9mmで、月別で見ると10月が203.4mmと最も多く、次いで9月が197.0mmとなっています。年間降水量は比較的少ない地域となっていますが、梅雨や秋雨に加え、近年は夏の集中豪雨や秋の台風によって影響を受けることが多くなってきました。冬は乾燥した晴天が続く太平洋岸に特徴的な気候となっています。

なお、令和3年（2021年）1月から12月までの年平均気温は15.8℃、年間降水量は1,557.5mmとなっています。



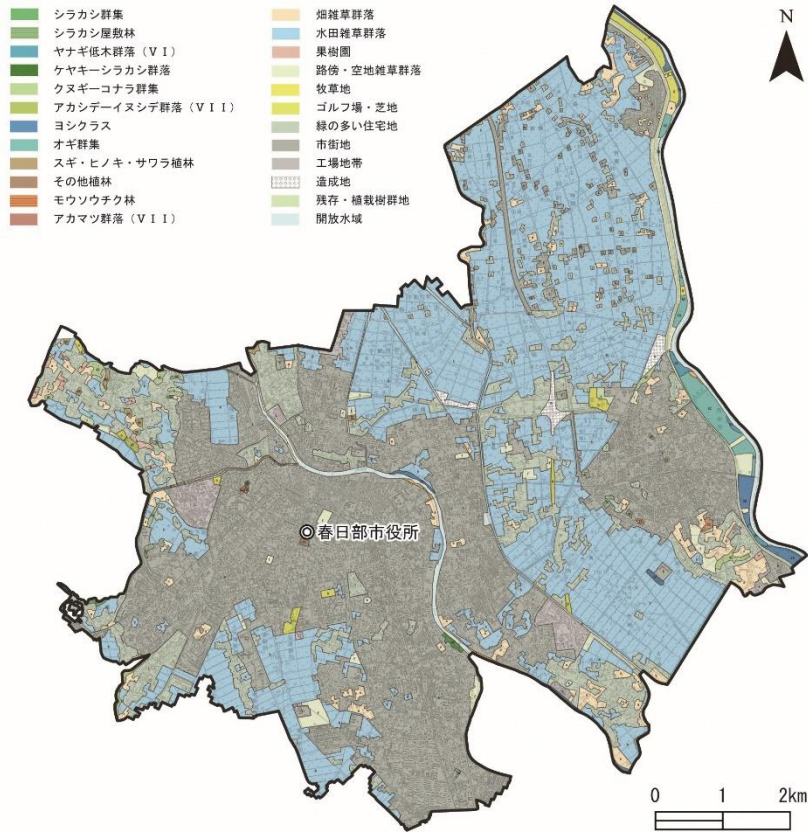
1-6 春日部市の気候(出典:気象庁(観測地点:越谷))

6 生態系

本市は、かつては水田が広がり、水生植物や両生類、水生昆虫などをはじめとした豊かな生態系を育てていましたが、高度経済成長期以降の急激な開発の中で、水田や畑、山林が減少し、生物多様性が失われています。

平成22年度（2010年度）に市が実施した動植物生息状況の現地調査によりますと、植物は約649種、動物は約872種、合計約1,521種の生物が確認されています。ハンゲシヨウ、ミドリシジミ、ニホンアカガエル、オオタカなど希少な動植物が市域の限られた環境の中で生息している状況が確認できた一方で、特定外来生物のアライグマやカミツキガメ、オオキンケイギクなどが生息範囲を拡大しており、農作物への被害、在来種への悪影響が懸念されています。

す。植生については、市街地はもちろん、郊外においても自然植生を保つ樹林は残されていませんが、クヌギやコナラなどの二次林が台地上に分布しているほか、シイやカシなどの社寺林、低地ではカシやケヤキなどの屋敷林がみられます。



(単位：種)

	植 物	動 物								合計
		哺乳類	鳥類	両生類	爬虫類	昆虫類	魚類	底生生物	動物計	
全体数	649	5	134	5	8	691	13	16	872	1,521
希少な動植物種数	43	2	35	2	5	11	1	2	58	101

(出典：第2次春日部市環境基本計画)

1-7 春日部市の動植物の生息状況

7 景観

本市は、市域のほぼ中央部に中心市街地が形成され、その周囲を田園が囲む景観構造を有しています。中心市街地に所在する春日部駅の東口周辺は、江戸時代の日光道中第4の宿場町である粕壁宿^{かすかべしゆく(じゅく)}であり、往時の町並みを彷彿させる店舗や土蔵、地割りなどの文化遺産が残されており、平成28年度(2016年度)に埼玉県の日光道中第4の宿場町^{にっこうどうちゆう}に指定されました。また、昭和初期まで、宿場の背後を流れる古利根川の舟運を利用した米や麦の集散地としても栄え、街道と河川を基軸としてまちが発展してきました。一方、一面に田畑が広がっていた春日部駅西口の開発は、高度経済成長期の昭和39年(1964年)に開始され、昭和

40年代に公共施設や住宅が次々と建設され一気に都市化が進んだ新しいまちといえます。駅から直線的に伸びる道路はふじ通りと呼称され、両側の歩道約1.1kmにわたって市の花であるフジが植栽されており、本市を代表する景観スポットとなっています。なお、ふじ通り沿道のフジは、景観法に基づく景観重要樹木に指定されています。

さて、郊外に目を向けると、宝珠花支台に所在する西宝珠花地区は、江戸時代の河岸場である西宝珠花河岸として栄えたまちで、江戸川の改修工事に伴い昭和26年(1951年)から28年(1953年)にかけて町並みの75%が移転しましたが、曳家などにより往時の姿を留めています。また、郊外の田園地帯、特に中川沿いや江戸川周辺には、散居集落や水塚など、近世の新田開発や近代の治水対策に由来する農村風景が残されており、生活や生業と密接に関係して歴史的に形成された伝統的な集落景観として貴重なものとなっています。



1-8 春日部市の景観(背景:国土地理院 CKT982X-C5-20・CKT951X-C6-38 を加工して利用、
左上:ふじ通り、左下:古利根川、右下:水塚)

8 自然災害

(1) 震災

近代、本市に最大の地震被害をもたらしたのは、大正12年(1923年)9月1日午前11時58分、相模湾を震源地として発生した関東大地震になります。県内の被害は、死傷者734人、建物の全半壊13,719戸におよびます。被害は県東部地区に集中し、粕壁町は北足立郡川口町(現・川口市)、北葛飾郡幸手町(現・幸手市)とともに三大被災地といわれるほどでした。粕壁町では幸いにも火災は発生しませんでした。市域の建物被害は甚大で、全壊は武里村で3割を超え、豊春村や粕壁町、幸松村でも2割近くに達しました。その一方で、台地上の内牧村や南桜井村、川辺村などの被害は軽微であったと伝えられています。

また、平成23年(2011年)3月11日午後2時46分、三陸沖を震源地として発生した東北地方太平洋沖地震では、本市における震度は5強を観測したほか、負傷者13人、建物火災1件、建物の半壊4件、道路陥没104か所、液状化4か所などの被害となりました。



1-9 関東大地震の被害状況(粕壁上町)(出典:かすかベデジタル写真館)

(2) 水害

本市では、市域の大部分が低地に位置していることから、外水及び内水氾濫による浸水被害が多く発生してきました。明治43年(1910年)8月の水害は、梅雨前線と2つの台風が重なったことから発生したもので、県内の被害は、死者・行方不明者347人、建物の全半壊・流失18,417戸となっています。

明治43年(1910年)の水害以降、市域に甚大な被害が発生した風水害は、昭和22年(1947年)のカスリーン台風によるものです。9月14・15日の2日間に秩父で611mmの雨量を記録するなど大雨をもたらした台風により河川は増水し、16日に利根川が北埼玉郡東村(現・加須市)地内で破堤したのをはじめ、荒川も熊谷市久下地内で破堤するなど、県内124か所で堤防が決壊し、市域はほぼ水没する事態となりました。県内の被害は、死者101人、負傷者1,430人、建物の全半壊2,841戸、流失396戸、床上浸水44,855戸、床下浸水34,647戸におよび、特に北埼玉郡域及び北葛飾郡域が最も大きな被害を受けました。

近年でも、市域においては、度々内水氾濫による水害が発生しています。平成3年(1991年)台風18号、平成5年(1993年)台風11号、平成20年(2008年)8月末豪雨、平成27年(2015年)台風18号などでは、建物の床上・床下浸水や道路冠水などの被害が発生しているほか、令和元年(2019年)台風19号では10月13日午前2時38分に本市で初めて避難勧告を発令する事態となりました。



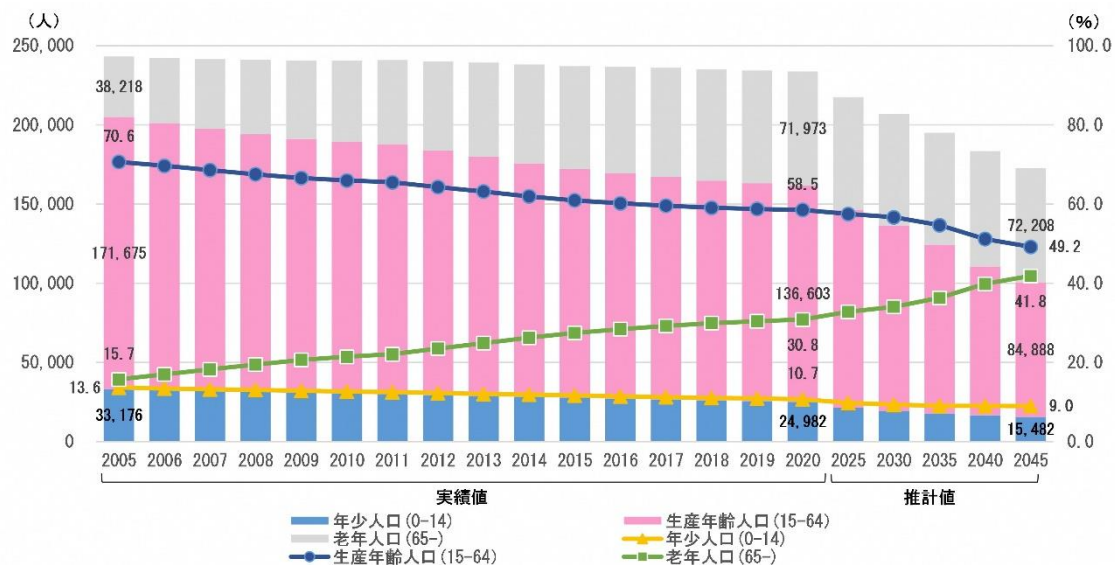
1-10 カスリーン台風の被害状況(春日部町・新町橋)(出典:かすかベデジタル写真館)

第2節 社会的状況

1 人口動態

本市は、都心から約1時間でアクセスできる公共交通の利便性の高さから、昭和40年(1965年)以降に人口が急増し、首都圏のベッドタウンとして発展してきましたが、近年の人口は自然減を背景に減少の傾向にあります。

総人口は、平成17年(2005年)10月1日の市町合併時には243,069人を数えましたが、それ以降は緩やかに減少しており、令和4年(2022年)10月1日時点では232,007人となっています。平成30年(2018年)に公表された国立社会保障・人口問題研究所の推計値によれば、将来も人口減少が続くと想定されており、令和27年(2045年)には172,578人になるとの試算が示されています。また、平成17年(2005年)から令和2年(2020年)までの年齢3区分別構成の人口推移をみると、年少人口(0~14歳)が24.7%減、生産年齢人口(15~64歳)が20.4%減となる一方で、老年人口(65歳以上)が88.3%増となり、今後も少子高齢化は続くことが推察されています。

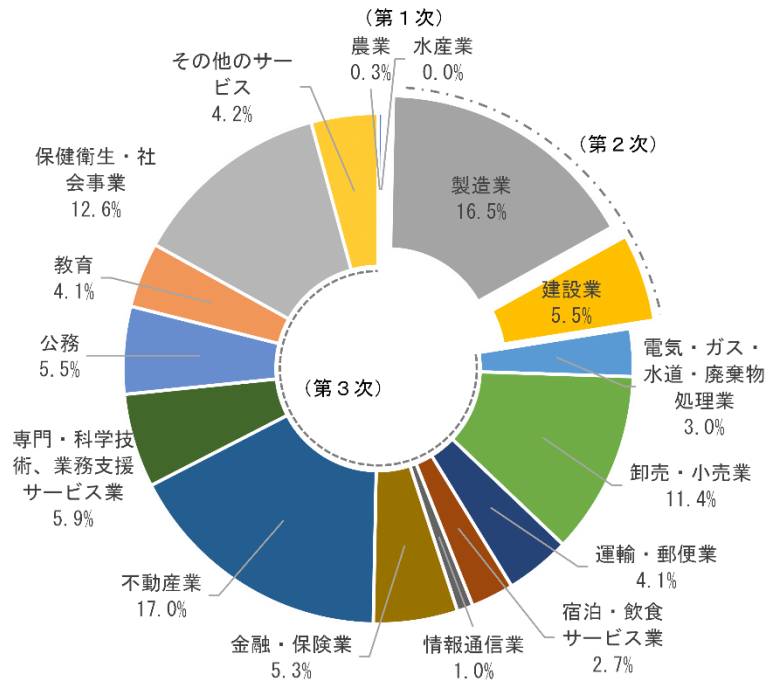


1-11 春日部市の人口の推移

(出典:住民基本台帳(2005~2020、各年10月1日現在)、社人研推計値(2025~2045))

2 産業

「埼玉の市町村民経済計算」によると、本市における平成30年度(2018年度)の市内総生産の構成は、第1次産業が0.3%、第2次産業が22.0%、第3次産業が76.9%となっています。経済活動別では、不動産業が17.0%、製造業が16.5%、保健衛生・社会事業が12.6%、卸売・小売業が11.4%、専門・科学技術、業務支援サービス業が5.9%の順になっています。



1-12 市内総生産の構成(平成30年度)

(1) 農業

「農林業センサス」によると、令和2年(2020年)の農家数は957戸、経営耕地面積は1,889haで、いずれも減少傾向が続いていますが、米をはじめ、トマトや茶、梨(ブランド名「春日部甘熟梨」)などの栽培が盛んです。

(2) 商業

「商業統計調査」によると、平成26年(2014年)の卸売業・小売業の事業所数は1,430所、従業者数は12,040人、年間商品販売額は約3,402億円となっています。事業所数と従業者数は減少傾向にあり、年間商品販売額は卸売が減少、小売が増加傾向にあります。

(3) 工業

「工業統計調査」によると、従業者数4人以上の令和2年(2020年)の製造業の事業所数は207所、従業者数は6,806人、製造品出荷額は2,047億円となっています。事業所数は減少傾向にありますが、従業者数と製造品出荷額は増加に転じています。

(4) 伝統産業

製造業が盛んな本市の特産品として、桐たんす、桐箱、押絵羽子板、^{おしえはごいた}麦わら帽子があります。市域における桐細工の起源に関する確固たる資料はありませんが、最古の記録として^{あんえい}安永7年(1778年)から新規に箱差冥加永^{はこさしみょうがえい}と呼ばれる税を納めたという記述があり、桐細工が宿場や農村部で農間余業の一つとして地域に根付いていたことがわかります。また、^{てんぽう}天保13年

(1842年)に作成された^{ほうがちょう}奉加帳に^{さしもの}指物屋や箱屋の職人名が列記されていることから、近世後期には桐たんすや桐箱の製造が市域の産業として成立していたと推察されています。その後、明治末期には国内有数の産地となり、最盛期の昭和10年(1935年)頃には企業数も500を数え海外にまで販路を拡げましたが、戦後は生活様式の変化などにより激減してしまいました。しかしながら、桐たんすや桐箱の製造技術は現在でも受け継がれており、桐たんすは昭和53年(1978年)に県の「伝統的手工芸品」、翌54年(1979年)に国(経済産業省)の「伝統的工芸品」、桐箱は昭和52年(1977年)に県の「伝統的手工芸品」の指定を受けています。

押絵羽子板は、桐製の羽子板に立体感のある押絵で装飾を施したものです。アジア太平洋戦争中に東京浅草から疎開してきた職人たちが、戦後に定住し生産を続けたことで特産品として根付きました。浮世絵を彷彿させるその姿は芸術品として高い評価を受け、昭和52年(1977年)に県の「伝統的手工芸品」、令和元年(2019年)に「江戸押絵」の一つとして国の「伝統的工芸品」の指定を受けています。

麦わら帽子は、古くから米や麦の生産地として栄えてきた本市において、農家の副業であった麦わら真田作りが発展したものです。明治10年(1877年)頃に手縫いで帽子を作るようになったのが始まりといわれ、明治30年(1897年)頃にドイツ製ミシンが導入され生産体制が確立し、岡山県と並び国内二大産地の一つとして、現在でも生産が行われています。



1-13 桐たんすの製造
(昭和33年)
(出典:かすかベデジタル写真館)



1-14 押絵羽子板の製造
(昭和34年)
(出典:かすかベデジタル写真館)

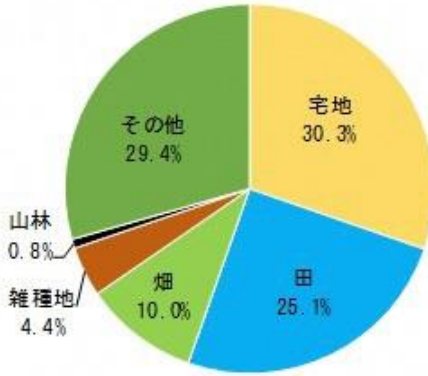


1-15 麦わら帽子の製造
(昭和30年代)
(出典:かすかベデジタル写真館)

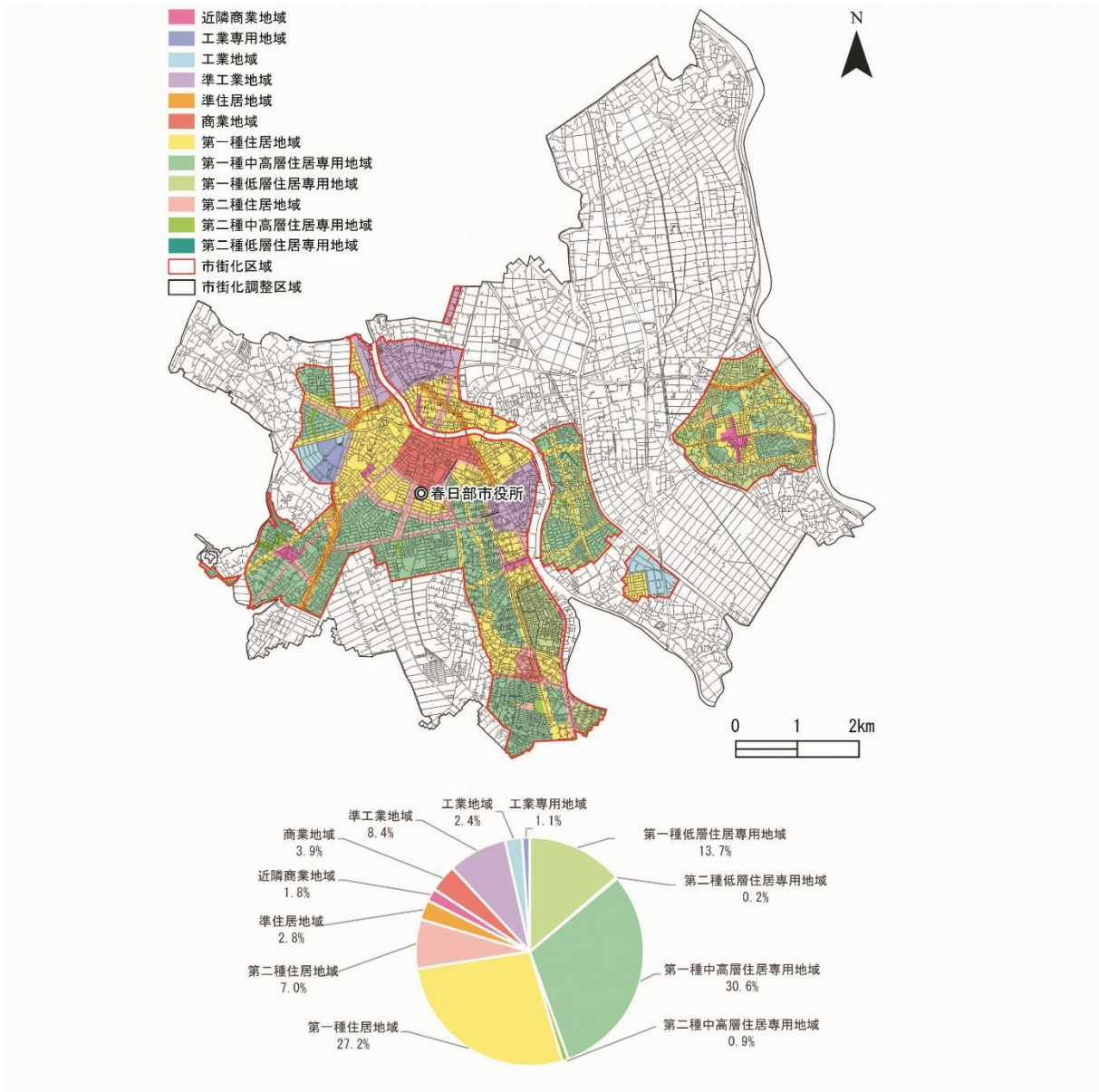
3 土地利用

本市の土地利用は、宅地が最も多く、令和3年(2021年)では30.3%となり、増加傾向にあります。次いで田が25.1%となっており、こちらは減少傾向が続いています。また、本市は、市内全域が都市計画区域に指定され、令和4年(2022年)4月現在、市街化区域面積33.7%、市街化調整区域面積66.3%となっています。

区分	面積 (令和3年)	構成比	
田	1,654 ha	25.1%	
畑	659 ha	10.0%	
宅地	2,000 ha	30.3%	
池沼	1 ha	0%	
山林	52 ha	0.8%	
原野	7 ha	0.1%	
雑種地	ゴルフ場用地	0 ha	0%
	遊園地等用地	0 ha	0%
	鉄軌道用地	36 ha	0.5%
	その他	255 ha	3.9%
その他(公共施設)	1,936 ha	29.3%	
総数	6,600 ha	100.0%	



1-16 春日部市の土地利用



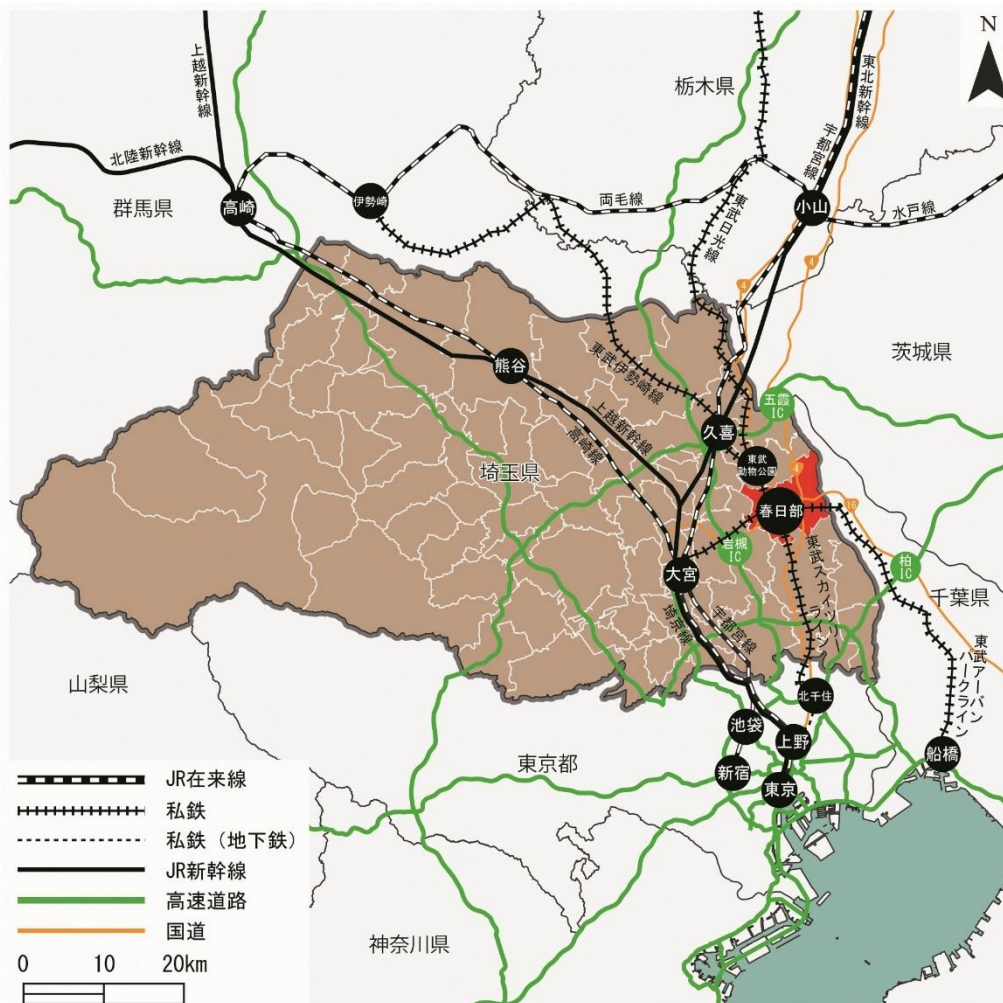
1-17 都市計画用途地域指定割合(令和4年4月現在)

4 交通

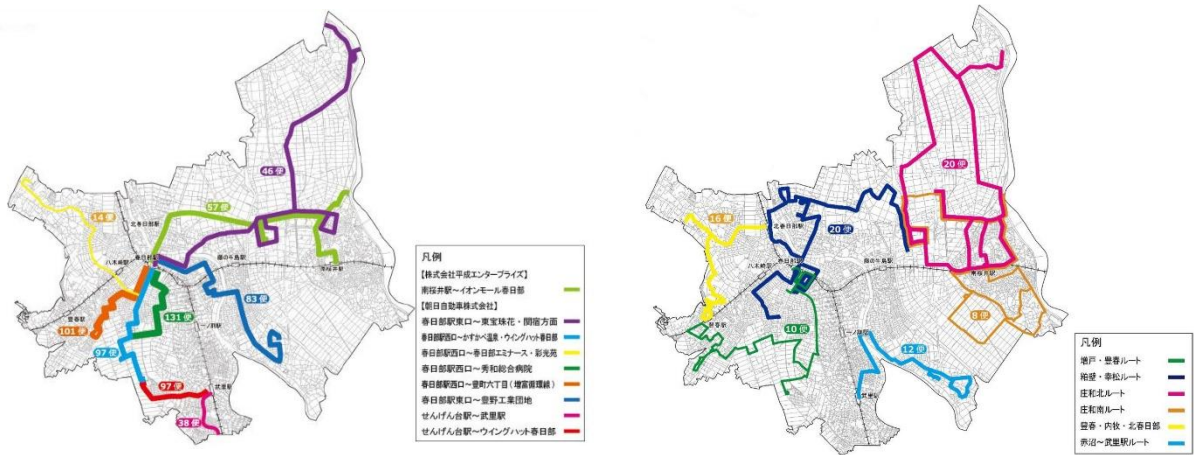
本市における鉄道路線は、東武鉄道のスカイツリーラインが市域の中央を縦断するほか、アーバンパークラインが市域の中央を横断しています。これら2路線は春日部駅で交差しており、市域には8駅が設けられています。なお、スカイツリーラインは東京メトロ日比谷線・半蔵門線、東急田園都市線に乗り入れており、都心へのアクセスの利便性が高い路線となっています。

一般道路は、国道4号が市域の中央、国道4号バイパス（新4号国道）が市域の東側を縦断するほか、国道16号が市域の中央を横断しています。また、主要地方道として、県道2号（さいたま春日部線）、県道10号（春日部松伏線）、県道42号（松伏春日部関宿線）、県道78号（春日部菖蒲線）、県道85号（春日部久喜線）などが整備されています。市域に高速道路のインターチェンジはありませんが、市の中心部から国道16号を經由して約8kmの位置に東北自動車道岩槻インターチェンジがあります。

バス路線は、令和元年（2019年）8月現在、春日部駅を中心に民間路線バスが9路線で運行しているほか、鉄道及び民間路線バス網の補完、公共交通空白地域への交通サービスの確保のため、コミュニティバス（春バス）が6路線で運行しています。



1-18 春日部市までの主要交通網



1-19 市内のバス路線(令和元年8月現在)(出典:春日部市地域公共交通計画)

5 観光

本市は、関東各都県から電車 | 本でアクセス可能な路線網を有するほか、関東有数の観光地である日光と首都圏を結ぶ経路上に位置していることから、巨大な観光商圈を背後に有する地理的環境にあります。

平成30年(2018年)の「春日部市観光に関するインターネット調査」によると、本市の

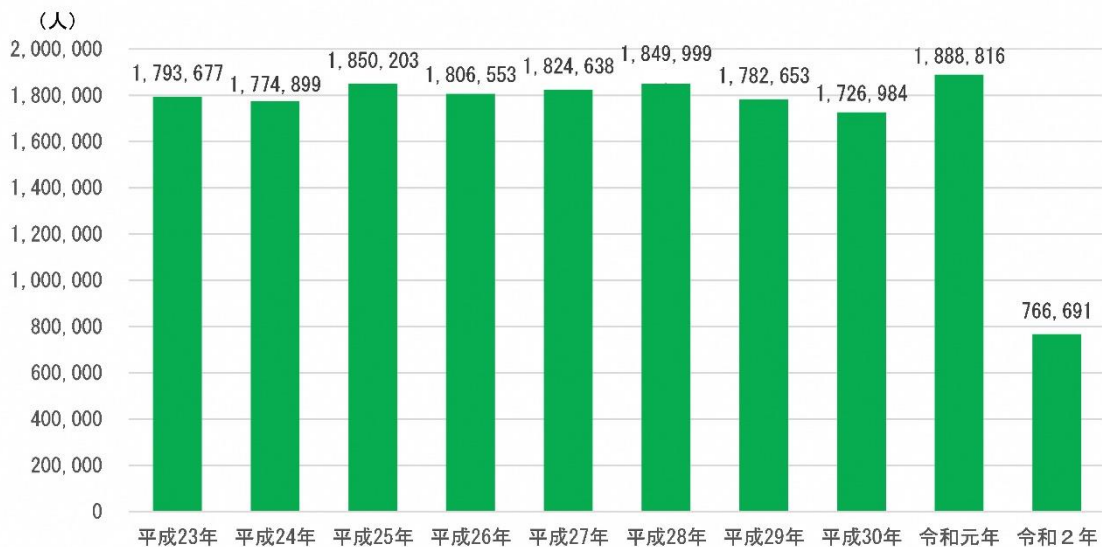


1-20 春日部市の観光資源

観光資源としては、「クレヨンしんちゃんの舞台」、「首都圏外郭放水路・龍Q館」が認知されているものの、「日光道中・粕壁宿」や「伝統工芸品」、「神明貝塚」など、その他の観光資源の認知度は低いものとなっています。来訪の目的をみても、若年層が多く含まれていた海外在住者では「クレヨンしんちゃん関連のスポットの訪問・グッズの購入」、国内居住者においては「首都圏外郭放水路の見学」が最も高いものとなっています。

このように、アニメや漫画の舞台として、国内のみならず世界的にも本市の名称は知られているほか、国史跡である神明貝塚などの文化遺産や市域の中心を流れる自然豊かな大落古利根川などの自然、豊かな農村景観と農産物、桐たんすや桐箱、押絵羽子板、麦わら帽子、かすかベフードセレクションといった特産品、春日部大凧あげ祭りや春日部夏まつりに代表される四季折々のイベントなど多種多様な観光資源があります。しかしながら、それらの観光資源は、市域の中で広く点在していることから、周遊観光が促進されにくいといった課題がみられます。また、県外在住者における本市の観光資源の認知度が低いことから、観光プロモーション、ブランディング活動の強化が必要となっています。

近年の観光入込客数をみていくと、平成23年(2011年)から28年(2016年)にかけては緩やかな増加傾向にあり、平成28年(2016年)の観光入込客数は185万人となりましたが、平成30年(2018年)には173万人まで減少しています。このような状況の中、政府による「明日の日本を支える観光ビジョン」の柱の一つに「魅力ある公的施設・インフラの大胆な公開・開放」、すなわちインフラツーリズムの推進が掲げられたことにより、本市においても、国などとの連携のもと、新たな試みとして、首都圏外郭放水路を、広く国内外からの来訪者を集める本格的な防災観光インフラ施設として活用すべく、平成30年(2018年)8月から民間運営見学システムによる社会実験を開始したところであり、平成31年(2019年)3月からはその第2弾がスタートしています。このような取組もあったことから、令和元年(2019年)の観光入込客数は過去最多の189万人となりましたが、コロナ禍であった令和2年(2020年)は77万人まで減少することとなりました。



1-21 春日部市の観光入込客数(出典:埼玉県観光入込客統計調査)

今後は、河川や街道の恵みを受けて栄えた宿場町、また江戸時代から長きにわたる大規模な治水事業を経て、最先端の土木技術に帰結した首都圏外郭放水路、そしてアニメの舞台などをはじめとした既存観光施設に加え、歴史や風土に培われた文化や伝統、地域の自然と共生しつつ発展してきた地域環境や景観、本市ならではの伝統産業や生業のほか、町並みの散策やスポーツイベント参加や観戦、地元の人々との交流などを観光に取り入れていく必要があります。

また、令和元年（2019年）12月以降のコロナ禍の中で、市内外から13万人以上が集まる春日部大凧あげ祭りや約25万人の来場者で賑わう春日部夏まつりなどのイベントの中止が相次いでいます。一部はオンラインや無観客などによる開催としたものもありますが、感染防止対策に留意した中でのイベント開催について、現在でも模索が続いているところです。



1-22 首都圏外郭放水路見学会チラシ

第3節 歴史的背景

1 原始



今から約12.5万年前の間氷期には、下末吉海進^{しもすえよしかいしん}と呼ばれる海水面の上昇によって、関東平野全体が内湾浅海^{ことうきやうわん}の古東京湾に覆われていました。その後、約7万年前の最終氷期に入ると海水面が低下しはじめ、最寒冷期の約2万年前には海水面が現在より100m以上も低下したと考えられています。これにより、海岸線が現在の浦賀水道^{うらがすいどう}より外側まで退いたため、東京湾全体が陸化に至りました。陸化した東京湾に流下する複数の河川は、次第に1本の流れへと合流し、湾底に古東京川^{ことうきやうがわ}と呼ばれる河川が形成されました。この古東京川に向かって上流から河川が流れ込む過程で、現在の中川低地では河川の浸食作用により峡谷^{きやうく}が形成されることになりました。最寒冷期を過ぎると、地球は温暖化に向かい、氷河の縮小によって海水面が上昇することになりました。この有楽町海進^{ゆうらくちやう}と呼ばれる海水面の上昇は、約6,500年前の縄文時代前期中葉にピークを迎えることから縄文海進とも呼ばれています。この頃の海水面は、現在より2~3m高かったものと推定されており、市域の大半が含まれる現在のの中川低地には奥東京湾^{おくとうきやうわん}と呼ばれる入り江が形成されていました。なお、海進のピーク時には、奥東京湾は県域を抜け、現在の栃木県栃木市の南部、渡良瀬遊水地^{わたらせゆうすいち}付近にまで達していたものと推定されています。なお、貝塚の分布状況や各地におけるボーリング調査の成果から、各時期における海岸線の復元作業が行われてきた経緯があり、約5,500年前に海水面の低下が始まり、約4,500年前には現在の草加市北部付近まで海岸線が退いたとされています。約4,500~3,500年前の間には、海水面の変動が停滞、もしくはわずかな海進があったと推定されており、その後、約3,500年前になると再び海水面の低下が始まり、約1,800年前に現在の海岸線が形成されたと考えられています。



1-23 古東京湾の海岸線



1-24 奥東京湾の海岸線



1-25 古東京湾と奥東京湾の痕跡を示す地質断面(上金崎地先)

(1) 旧石器時代

市域において、最古の人々の生活の痕跡は、今から約 30,000 年前の後期旧石器時代前半まで遡ります。旧石器時代の人々の生活の痕跡はローム層の中に残され、西金野井地区の風早遺跡や馬場遺跡、内牧地区の坊荒句遺跡、花積地区の慈恩寺原北遺跡では、約 28,000 年前に鹿児島県の始良カルデラの巨大噴火で噴出した火山灰が堆積した層よりも下の地層で石器が見つかっています。また、後期旧石器時代後半の約 18,000 年前になると、遺跡数が増加するほか、内牧地区の坊荒句北遺跡では石器製作跡とともに礫群と呼ばれる調理場の跡が確認されており、定住の動きが推察されます。



1-26 風早遺跡出土の局部磨製石斧(市有形文化財)



1-27 坊荒句北遺跡の礫群

(2) 縄文時代

縄文時代は今から約 16,000 年前に始まると考えられていますが、市域では草創期の土器は見つかっておらず、当時使用していた尖頭器(石槍)などの狩猟に用いた石器が散見されるのみです。早期になると、坊荒句遺跡で約 9,000 年前の住居跡、坊荒句北遺跡で約 7,000 年前の屋外炉跡と貝塚が確認されています。前期には遺跡数の増加が顕著となり、約 6,500 年前に海進がピークを迎えます。花積下層式土器の標式遺跡である花積貝塚をはじめ、約 6,000 年前になると東中野地区の犬塚遺跡や米島地区の米島貝塚など貝塚を伴う集落が数多く形成されています。その後、約 5,500 年前、海退に転じる中期以降は遺跡数が減少します。令和

2年(2020年)3月に国史跡に指定された西親野井地区の神明貝塚は後期にあたる約3,800年前の馬蹄形貝塚を伴う集落で、豊富な動植物遺存体と出土石器などから、集落を営んだ人々の生業形態とその地域性を知ることができる点で重要な遺跡となっています。なお、晩期の集落はみられませんが、東中野地区の権現山遺跡などで当時の土器が散見されます。



1-28 市域の最初のムラ(坊荒句遺跡)



1-29 市域の最古の貝塚(坊荒句北遺跡)



1-30 海進ピーク時の貝塚(犬塚遺跡)



1-31 貝層断面(神明貝塚)

(3) 弥生時代

市域を含め県東部地域では弥生時代の遺跡はほとんど確認されていません。市域では、昭和49年(1974年)頃に谷原新田地区の水路工事に伴って地表下約1.5~2mの位置から見つかった中期の広口壺形土器が唯一の痕跡でしたが、平成13年(2001年)に倉常地区の須釜遺跡で、中期にあたる約2,100年前の再葬墓群が発掘されたことにより、人々が低地に進出していたことが明らかになりました。県内では、北部の熊谷市や行田市などで低地から多くの弥生時代の遺跡が確認されていますので、須釜遺跡の周辺を含め市域の低地でも弥生時代の遺跡が存在している可能性があります。



1-32 谷原新田地区出土の弥生土器



1-33 須釜遺跡2号再葬墓

2 古代



(1) 古墳時代

古墳時代になると再び台地上で人々の生活の痕跡が確認できます。前期には、権現山遺跡で4世紀前半の方形周溝墓とともに集落が見つかるほか、内牧や花積、米島地区などでも小規模な集落が散見されます。この時期、低地では銚子口地区の沼廻遺跡で多量の土器が見つかる一方、人々の居住の痕跡は確認できていません。市域で、遺跡数が大きく増加するのは古墳時代後期、6世紀代になってからで、台地上のみならず、小湊地区の小湊山下遺跡や小湊山下北遺跡のように低地上にも集落が形成されるようになります。市域で集落が増加する一方で、墳墓としての古墳は規模が小さく、その分布もやや希薄なものとなっていますが、内牧塚内古墳群のほか、東中野地区の向之内塚山古墳といった6世紀以降のものがみられます。

なお、内牧塚内4号墳は1基の古墳に武蔵型と下総型といった2つの地域で製作された円筒埴輪が立てられた事例として注目されており、当時の市域が武蔵地域と下総地域の境界に位置していたことを物語っています。



1-34 古墳時代の住居跡(塚崎遺跡)



1-35 内牧塚内4号墳(市史跡)

(2) 奈良・平安時代

奈良時代から平安時代の市域は、旧利根川流路と想定される古利根川・古隅田川を境として、西側が武蔵国埼玉郡、東側が下総国葛飾郡に属していました。なお、『和名類聚抄』には埼玉郡に5郷、葛飾郡に8郷あったことが記されていますが、市域がいずれの郷に属していたかはわかりません。8～9世紀代の台地上の遺跡は、西宝珠花地区の貝の内遺跡や陣屋遺跡において集落の規模が拡大するとともに、硯や帯金具（ベルトの飾り金具）など当時の役人層が使用したような道具が見つかります。また、低地上では、古墳時代後期に出現した小湊山下遺跡や小湊山下北遺跡では集落の規模が縮小しますが、約2km南西に離れた古隅田川沿いに、新たに浜川戸遺跡と八木崎遺跡が形成されます。その後、10世紀になると、市域ではほとんど遺跡がみられなくなります。11～12世紀代の様相は考古学的な成果がなく詳しいこ

とはわかっていませんが、市域は古利根川と古隅田川を境として、西側に秀郷流藤原姓の太田氏によって開発された太田荘、東側に太田氏から分かれた下河辺氏によって開発された下河辺荘が広がっていたと推定されています。

下河辺荘に含まれる市域の低地部を所領していたと考えられるのが春日部氏です。『吾妻鏡』文治3年(1187年)3月10日条は、春日部兵衛尉が土佐国の夜須行宗の壇ノ浦合戦(1185年)での勲功を源頼朝の前で証言した記事で、春日部氏の初出史料となっています。春日部という姓は古代官人の間でもみられますが、本市ゆかりの春日部氏は紀氏流武士大井氏や品川氏などと同族で、『尊卑分脈』紀氏系図をもとにすると、大井実春の弟、実高が春日部の地に土着し、春日部姓を名乗ったものと考えられます。このことから、12世紀後半には春日部という地名が成立していたと推定されています。



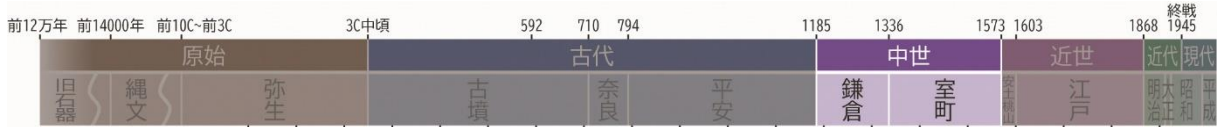
1-36 陣屋遺跡出土の硯と帯金具



1-37 奈良・平安時代のムラ(八木崎遺跡)(提供:埼玉県教育委員会)

なお、市域には奈良時代から平安時代の由緒をもつ寺院や神社、仏像などがありますが、いずれも伝承の域を出ないものでした。しかしながら、令和元年(2019年)10月に、秘仏となっている小淵山観音院の本尊の調査を実施したところ、破損仏ながら10世紀以前の一木彫成像であることがわかり、市域ではこの時代の唯一の仏像となっています。

3 中世



(1) 鎌倉・南北朝時代

中世の市域も古利根川・古隅田川を境として、西側が武蔵国埼玉郡太田荘、東側が下総国葛飾郡下河辺荘に属していました。市域では、太田荘の花積郷や内牧郷、下河辺荘の春日部郷や宝珠花郷、金野井本郷などの郷名が確認できます。なお、太田氏が地頭を務めていた太田荘は鎌倉時代初頭には幕府の直轄領となり、下河辺氏が地頭を務めた下河辺荘は鎌倉時代中期に金沢北条氏かねさわほうじょうしがその職を継承しています。

下河辺荘春日部郷を所領としていたのが鎌倉武士である春日部氏で、粕壁地区の浜川戸遺跡がその居館跡と推定されています。『吾妻鏡』によると、春日部氏は、兵衛尉じしやうが治承・寿永の乱の壇ノ浦合戦に登場して以降、大和前司実平やまとのぜんじさねひら、甲斐守実景かいはのかみさねかげと幕府内の地位を高めていきましたが、宝治元年（1247年）の宝治合戦において、敗れた三浦氏に味方したことから、実景父子は自決、所領は幕府に没収されてしまいました。

その後、南北朝時代になると、春日部重行かすかべしげゆきや時賢ときかたといった春日部姓の武将が南朝の後醍醐天皇ごだいごてん方で活躍していたことが『太平記』などで確認できます。鎌倉武士であった春日部氏と南北朝時代の春日部氏の系譜上のつながりは不詳ですが、延元元年・建武3年（1336年）に後醍醐天皇が春日部重行に下総国下河辺荘内春日部郷の地頭職を安堵した古文書が残っています。



1-38 居館跡の外堀(浜川戸遺跡)



1-39 春日部八幡神社

(2) 室町・戦国時代

室町時代から戦国時代にかけての市域は様々な勢力下にあったことがわかっています。室町幕府が設けた東国統治機関である鎌倉府体制が確立すると、市域も鎌倉府の影響を受けるようになります。享徳の乱（1454年）後は、古河を本拠とした古河公方の勢力下にあったと

考えられます。その後、小田原を本拠とした後北条氏が武蔵国にも勢力を伸ばし関東での覇権を確立すると、市域は後北条氏の支配地域となりましたが、天正18年(1590年)の豊臣秀吉の関東攻略により、後北条氏は滅亡しました。この間の市域では、永禄12年(1569年)に多田新十郎が薩埵山(現・静岡県静岡市)で武田氏方の夜襲に際し敵1人を討ち取ったことを賞する感状や元亀4年(1573年)に関根図書助が糟ヶ辺で敵を討ち取ったことを賞する感状の写しや、一ノ割の圓福寺ゆかりの井上氏など、土豪武士たちに関わる古文書や伝承が残されています。

さて、中世の市域は、大部分が下総国に属していました。そのため、同国一宮香取神宮に由来する香取神社が多く分布しています。現存しませんが、一ノ割香取神社には享徳3年(1454年)の鰐口が、八丁目香取神社には永禄10年(1567年)の棟札があったと伝わっています。また、後世の写しと考えられていますが、西金野井香取神社には徳治元年(1306年)の棟札があります。春日部氏との関係では、春日部稻荷神社は寛元年間(1243-47年)に春日部実景が京都伏見稻荷を、春日部八幡神社は元弘年間(1331-34年)に春日部時賢が鎌倉鶴岡八幡宮を勧請したものと伝えるほか、備後須賀稻荷神社にも春日部氏と関係する由緒が伝わっています。

一方、寺院については、小淵地区の観音院(本山派修験)が正嘉2年(1258年)の創建と伝えられているほか、浄春院(曹洞宗)は開基を古河公方重臣の幸手一色氏としています。また、戦国時代末頃に不動院という本山派修験の寺院が開かれ、小田原の玉瀧坊とともに関東の修験寺院を統括する立場にありましたが、明治42年(1909年)から大正5年(1916年)にかけて東京へ移転しました。赤沼地区の常楽寺(真言宗)は弘安5年(1282年)の創建と伝えられ、応永27年(1420年)造立の銅造阿弥陀如来坐像が伝来しています。粕壁地区の最勝院(真言宗)は永正元年(1504年)の創建と伝えられ、境内には京都で自刃したといわれる春日部重行の遺骨を納めたと伝わる塚が残されています。また、西金野井地区の花蔵院(真言宗)は、香取神社の別当寺として戦国時代には存在していたと考えられます。

4 近世



(1) 江戸時代

天正18年(1590年)に徳川家康が江戸に入り、慶長8年(1603年)に江戸幕府を開くと、市域も大きく変化しました。幕府は、江戸を政治経済の拠点とするため、五街道を中心とする街道の整備、河川や用悪水路の改修による舟運の整備と新田の開発に取り組みました。

江戸から北へ伸びる街道として、江戸と日光・東北地方を結ぶ日光道中・奥州道中が整備さ

れました。市域にも日光道中が通り、江戸日本橋から数えて4番目の宿場町である粕壁宿かすかべしゆく(じゆく)として栄えました。江戸時代後期の天保14年(1843年)の記録には、人口が3,701人、家数が773軒のほか、大名が宿泊する本陣ほんじんと脇本陣わきほんじんが各1軒、旅籠45軒、問屋場1か所と記されています。日光道中は、東北地方の参勤交代の大名をはじめ、日光山の関係者や参拝者、各地の商人や松尾芭蕉などの文化人といった様々な人々が往来し、粕壁宿で休泊しました。また、粕壁宿と近隣の城下町を結ぶ脇往還わきおうかんと呼ばれる街道もあり、岩槻城いわつきじょうと粕壁宿を結ぶ岩槻道、関宿城せきやどじょうと粕壁宿を結ぶ関宿道は、重要な地域を結ぶ結節路となっていました。



1-40 粕壁宿推定模型



1-41 岩槻道の道標

市域の幕府領の村々は、天正18年(1590年)から寛政4年(1792年)まで江戸幕府の代官伊奈氏の支配下にありました。伊奈氏は、武蔵国などの村々に領と呼ばれる地域単位を設定し、広域支配を行っており、市域では岩槻領いわつきりょう、新方領にいがたりょう、百間領もんまりょう、幸手領さつてりょう、庄内領しょうないりょう、松伏領まつぶりょうの6つが確認できます。

16世紀末頃から17世紀にかけて、後北条氏や徳川氏によって、利根川流域で様々な河川整備工事が行われ、寛永年間(1624-43年)の江戸川の開削とともに、利根川の流路が変更されることとなりました。なお、江戸川の開削や庄内領の開発などに携わった人物が、伊奈忠治いなただはるの下で活躍した小島庄右衛門正重こじましようえもんまさしげで、西宝珠花地区の小流寺しょうりゅうじには江戸川開削の歴史を伝える縁起や剃髪した正重の坐像などが伝来しています。そして、この流路変更の過程で、武蔵国と下総国の国境が東へ移動し、寛永12年(1635年)頃に中川(庄内古川)が国境となりました。市域では、古利根川の西側が武蔵国埼玉郡、古利根川の東側から中川(庄内古川)までが武蔵国葛飾郡に編入されることとなり、中川(庄内古川)の東側が下総国葛飾郡となりました。なお、河川整備に伴って用悪水路が整備されていった中川低地では新田開発が進み、市域でも低地部に多くの村が誕生しました。また、新たに開削された江戸川は、流路変更により日本有数の広域河川となった利根川と連絡し、関東の諸地域から江戸へ物資を輸送する物流の大動脈となりました。市域では、西宝珠花地区や西金野井地区に河岸場かしばが形成され、年貢米をはじめとする物資の荷積みと荷揚げ場として栄えました。

新田開発が進む中で多くの村が成立した市域では、それに伴って寺院や神社の創建も多くみられます。その中で、中世から続く有力な寺社である常楽寺や最勝院、西金野井香取神社な

どには、将軍が発給した朱印状しゆいんじょうが残されています。また、市域では小湊地区や内牧地区ましとみ、増富地区、増戸地区などで22軀の円空えんくう仏が確認されており、観音院や旧宮本院、旧南蔵院といった本山派修験の寺院に13軀が伝来しています。修験者として各地を行脚した円空が関東を訪れたのは晩年の頃といわれ、小湊地区にあった不動院は円空がその制作活動の場としていたと推察されています。なお、江戸時代の庶民信仰の一つに富士信仰があり、この信仰の組織である富士講ふじこうが各地に結成されました。講中の人々は富士塚ふじづかと呼ばれる富士山を模した人工の塚を築き、市域では29基の富士塚が確認できます。

文化面では、近世後期には俳諧や国学などの文芸、剣術などの武芸の広範な展開がみられ、都鳥の碑みやこどりや梅若塚うめわかづかなど古代の伝承を考証する動きも確認できます。そして、西宝珠花地区の大凧揚げや大畑地区のやったり踊りのほか、各地区に伝わる獅子舞や神楽、囃子などの伝統芸能がありますが、それらは概ね江戸時代に始まったものになります。なお、現在の春日部夏まつりも、江戸時代に粕壁宿の市神で牛頭天王社と呼ばれていた八坂神社の祭礼に由来します。



1-42 水角神社の富士塚(市有形民俗文化財)



1-43 宝珠花大凧揚げ(市無形民俗文化財)

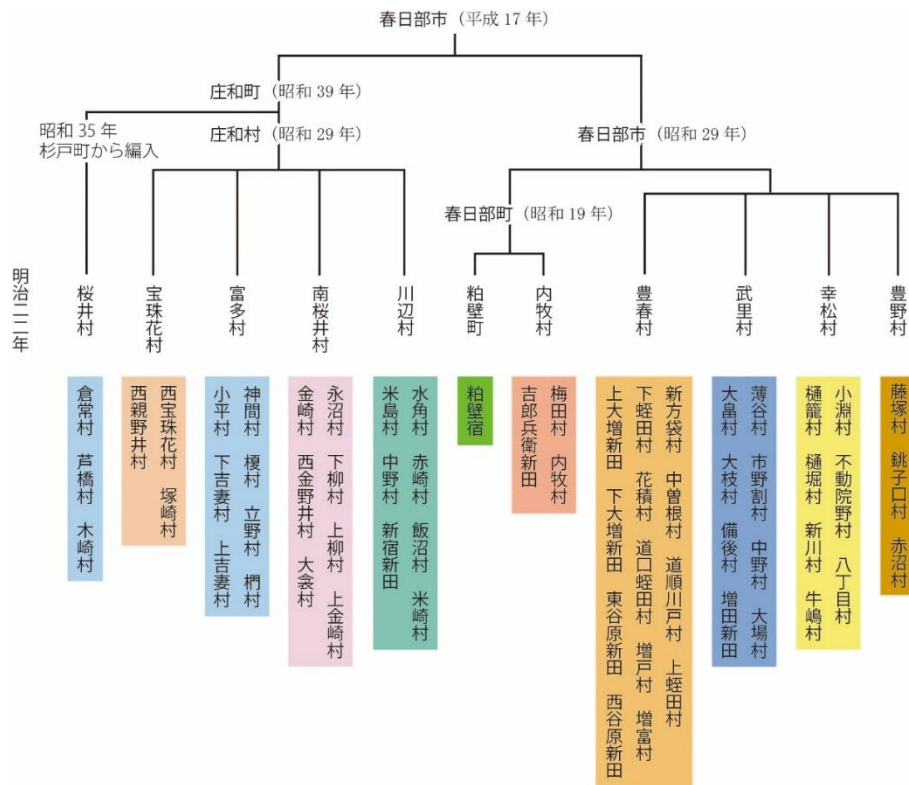
5 近現代



(1) 近代(明治・大正・昭和時代)

明治元年（1868年）、新政府による府藩県三治制により、市域は武蔵国埼玉郡粕壁宿ほか17か村が武蔵知県事管轄、武蔵国葛飾郡9か村及び下総国葛飾郡26か村が下総知県事管轄、武蔵国埼玉郡増戸村ほか7か村が岩槻藩に属することとなりました。翌年には、武蔵知県事管轄は大宮県（後に浦和県）、下総知県事管轄は葛飾県（後に印旛県）となり、明治4年（1871年）の廃藩置県を経て、浦和・岩槻・忍県などが統合され、（旧）埼玉県が誕生しました。この時期には、春日部地域は埼玉県、庄和地域は印旛県（後に千葉県）に属していましたが、明治8年（1875年）になると、江戸川西側の庄和地域を含む43か村が千葉県から埼玉県に移管され、庄和地域が（旧）埼玉県の一部となりました。なお、現在の埼玉県域がほぼ定まったのは、明治9年（1876年）に熊谷県の一部と（旧）埼玉県が統合したことによります。明治

22年（1889年）4月に市制町村制が施行されると、市域では11町村が成立しました。江戸時代の地名を継承する粕壁町や内牧村、宝珠花村、中世以来の郷名から名付けられた幸松村や桜井村、南桜井村、川辺村、新たな村名とした豊春村や武里村、豊野村、富多村など、様々な村名が生まれました。昭和19年（1944年）4月には、戦時合併で粕壁町と内牧村が合併し、春日部氏の名に由来する春日部町が成立しました。戦後、町村合併促進法が施行されると、昭和29年（1954年）7月に春日部市と庄和村（昭和39年（1964年）に庄和町）が誕生しました。そして、平成17年（2005年）10月に春日部市と庄和町が合併し新たな春日部市となり、現在に至っています。



1-44 市域の町村変遷

江戸時代に陸上・水上交通の要衝として繁栄した本市は、明治時代以降も、主要な道路や鉄道が交差する交通の要衝として発展してきました。明治10年（1877年）に、東京・深川扇橋一栃木・生井河岸間に蒸気船通運丸が就航し、蒸気船による貨客輸送が開始されました。通運丸は、江戸川や利根川だけでなく、霞ヶ浦や北浦、渡良瀬川、思川の流域に至るまで人や物資を運び、東京と北関東を結ぶ主要交通網へと成長し、市域では江戸川沿いの西金野井と西宝珠花が船着場として栄えていました。

一方、陸上では、江戸時代の日光道中は明治時代に入ると陸羽街道となり、明治11年（1878年）には街道を利用したイギリス人旅行家のイザベラ・バードが市域に宿泊しています。また、明治26年（1893年）から4年間、この街道を利用した千住馬車鉄道が千住茶釜橋ー粕壁間で運行されました。明治32年（1899年）になると、東武鉄道が北千住ー久喜間で開通し、

粕壁駅が開業しました。さらに、昭和4年(1929年)から5年(1930年)にかけて、北総鉄道(後に総武鉄道、現在の東武アーバンパークライン)も開通し、市域における鉄道網の整備が進められました。なお、牛島のフジが東京近郊の名所として多くの人々に知られるようになったのは東武鉄道開通後のことで、跡見花蹊や幸田露伴、徳川昭武、渋沢栄一、清浦奎吾、田山花袋、三好達治など、近現代の著名人も訪れています。



1-45 粕壁町の全景(明治40年頃)
(出典:かすかベデジタル写真館)



1-46 粕壁駅(昭和11年)
(出典:かすかベデジタル写真館)

本市では、市域の大部分が低地に位置していることから、外水及び内水氾濫による浸水被害が多く発生してきました。明治時代に23年(1890年)と43年(1910年)の少なくとも2回の大水害が発生したほか、昭和22年(1947年)のカスリーン台風の被害の記録も残っています。また、「蛙のしょんべんで水がいっちゃう所だ」と例えられるように排水不良の土地が多く、ひとたび豪雨となると湛水期間が長期間におよぶこともありました。このような水害との戦いの中で、明治24年(1891年)6月にめがね橋(旧倉松落大口逆除)、明治25年(1892年)7月に五ヶ門樋といった逆流防止の煉瓦製樋門が建設されたほか、明治42年(1909年)から大正5年(1916年)にかけて全国一の規模をもった新方領耕地整理が進められました。そして、昭和25年(1950年)には、カスリーン台風を契機とし、200mの河川幅を400mに拡幅する江戸川の改修工事が計画されることとなりました。この計画は宝珠花村全体の75%にあたる250戸が河川敷になるという計画であったため、県内初の土地区画整理事業として昭和26年(1951年)から28年(1953年)にかけて市街地の移転事業が実施され、西宝珠花の町並みが約300m西方へ移ることとなりました。



1-47 めがね橋(県有形文化財)



1-48 移転後の西宝珠花(昭和27年)
(出典:かすかベデジタル写真館)

教育面では、明治5年(1872年)に粕壁学校が開校し、翌年以降、各地で小学校が設立され、明治時代前期は市域の初等教育が整えられていく時期になります。そして、高等教育では、明治32年(1899年)に、粕壁町に埼玉県第四中学校が開校し、その後、県立粕壁中学校と改称されました。また、明治44年(1911年)には、町立粕壁高等女学校が開校し、昭和5年(1930年)に県立に移管しました。その後、昭和23年(1948年)の学制改革に伴い、粕壁中学校は県立春日部高等学校に、粕壁高等女学校は県立春日部女子高等学校に改組されました。なお、『雪之丞変化』で知られる昭和初期の大衆作家である三上於菟吉は、明治24年(1891年)に桜井村で生まれ、粕壁中学校を卒業しました。また、俳誌『寒雷』を主宰した加藤楸邨は、昭和4年(1929年)から8年間、粕壁中学校に勤務し、粕壁医院の診察を手伝っていた水原秋桜子との交流を契機に俳句の世界へ傾倒するなど、現在の春日部高等学校に由縁がある文化人もみられます。



1-49 県立春日部高等学校(昭和29年)
(出典:かすかベデジタル写真館)



1-50 県立春日部女子高等学校(昭和29年)
(出典:かすかベデジタル写真館)

戦時体制下の昭和18年(1943年)に、東京第一陸軍造兵廠から、精工舎の陸軍関係時計信管部門を南桜井村に疎開するよう命令がありました。翌年に建設された工場は服部時計店南桜井工場と命名され、その規模は工場敷地約6万坪、厚生施設敷地約9万坪、建物は工場35棟、厚生施設100棟におよぶものでした。そして、昭和20年(1945年)年には造兵廠の一部が移転し、東京第一陸軍造兵廠江戸川工場となりました。また、昭和19年(1944年)になると、重要施設の周辺で強制疎開が実施されるようになりました。市域では縁故疎開者の受け入れが多かったほか、幸松村の浄春院と仲蔵院、宝珠花村の宝蔵寺で神田小川国民学校の児童を受け入れました。

戦後、服部時計店南桜井工場は農村時計製作所となり、それを継承したリズム時計株式会社



1-51 南桜井駅とリズム時計工場(昭和45年)(出典:かすかベデジタル写真館)

の工場が昭和25年(1950年)から平成9年(1997年)まで所在していました。また、南桜井工場の寮は引揚者や戦災者の緊急収容施設となったほか、東京第一陸軍造兵廠江戸川工場の診療所などの払い下げにより養護施設である子供の町が開設されました。

(2) 現代(昭和・平成・令和時代)

東京オリンピックや埼玉国体が開催された1960年代、高度経済成長に伴い、武里団地の建設や春日部駅西側の開発など、現在の市の姿につながる大きな事業や各種施設の建設が進められました。人口の増加に伴う住環境の整備の一環として建設されることとなった武里団地は昭和38年(1963年)に準備工事が始まり、翌年には江戸川近辺の台地などから約100万m³の土が搬入され埋立てが行われました。本体工事は昭和40年(1965年)から進められ、翌年には1~4街区2,424戸の入居が開始されました。入居開始後も工事は続き、昭和43年(1968年)、10階建て2棟、4・5階建て約180棟、9街区、総戸数6,119戸からなるマンモス団地が完成しました。

また、春日部駅西側の開発は昭和39年(1964年)に開始され、昭和42年(1967年)の埼玉国体の女子ソフトボールの会場となった^{おおぬま}大沼運動公園グラウンドの完成で促進されました。その後、昭和44年(1969年)の春日部市立病院、昭和46年(1971年)の春日部市役所など、駅西側には公共施設や住宅が次々と建設され都市化が急激に進み、昭和46年(1971年)に春日部駅西口が開設されました。



1-52 武里団地(昭和44年)
(出典:かすかベデジタル写真館)



1-53 市役所の建設(昭和45年10月)
(出典:かすかベデジタル写真館)

その後も、旧春日部市では昭和59年(1984年)の古利根公園橋の建設、平成元年(1989年)のふるさと創生基金を活用した「彫刻のあるまちづくり」の推進、旧庄和町では平成2年(1990年)の^{おおだこいかん}大風会館や庄和総合公園の建設など、魅力的なまちづくりの実現のため、生活環境の整備が進められました。なお、平成16年(2004年)に開催された「彩の国まごころ国体」に合わせて、卓球会場として春日部市総合体育館(ウイング・ハット春日部)が建設されたほか、軟式野球会場となった庄和球場が改修されています。

平成17年(2005年)10月に、旧春日部市と旧庄和町は合併し、新たな春日部市が誕生しました。平成18年(2006年)3月に、公募や市民アンケートをもとに、「春」の文字を基本モチーフに、未来を表す正円と飛翔する市民を描いたデザインの市章が制定されました。ま

た、平成19年（2007年）2月には、市民から親しまれ、さらには国特別天然記念物「牛島のフジ」の由縁から「フジ」が市の花に、市の伝統産業である「桐たんす」や「桐箱」、「押絵羽子板」の材料である「キリ」が市の木に、歴史的な故事や市民からの愛着がある「ユリカモメ」が市の鳥に指定されました。そして、令和3年（2021年）1月には、市制施行15周年を記念して、さらに市民の連帯感やまちに対する愛着を深め、「住んで良かった」と思えるまちを実現するため、「春日部市民憲章」が制定されました。

さらに、令和元年（2019年）12月、春日部駅付近連続立体交差事業について国の事業認可が告示され、周辺の関連事業とともに市役所本庁舎の建て替えなどを含む中心市街地のまちづくりが動き出しました。また、北春日部駅周辺地区における土地区画整理事業、八潮市を起点とする東埼玉道路の本市までの延伸、その沿線となる赤沼・銚子口地区における産業基盤整備事業など、市域全体でもまちづくりが大きく動き出しています。